

主日礼拝説教「み言葉の種を」

日本基督教団石神井教会 2018年1月28日

【旧約聖書日課】箴言 2章1～9節

¹わが子よ

わたしの言葉を受け入れ、戒めを大切に

²知恵に耳を傾け、英知に心向け

³分別に呼びかけ、英知に向かって声をあげるなら

⁴銀を求めようとしてそれを尋ね

宝物を求めようとしてそれを捜すなら

⁵あなたは主を畏れることを悟り

神を知ることに到達するであろう。

⁶知恵を授けるのは主。主の口は知識と英知を与える。

⁷主は正しい人のために力を

完全な道歩く人のために盾を備えて

⁸裁きの道を守り

主の慈しみに生きる人の道を見守ってください。

⁹また、あなたは悟るであろう

正義と裁きと公平はすべて幸いに導く、と。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 2章6～10節

⁶しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語り、それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。⁷わたしたちが語るの、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。⁸この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。⁹しかし、このことは、

「目が見もせず、耳が聞きもせず、

人の心に思い浮かびもしなかったことを、

神は御自分を愛する者たちに準備された」

と書いてあるとおりです。¹⁰わたしたちには、神が“霊”によってそのことを明らかに示してくださいました。“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。

【福音書日課】マルコによる福音書 4章1～9節

¹イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。²イエスはたとえていろいろと教えられ、その中で次のように言われた。³「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。⁴蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。⁵ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。⁶しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。⁷ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。⁸また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」⁹そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

聖書の話が聞けて、イエスさまの話ができる場所というのは、教会以外では私たちの身近にはそうありません。教会以外の場所で、気軽に聖書の話ができる場所はみなさんの周りにはあるでしょうか？キリスト教学校やキリスト教関係の施設、あるいはもっとゆるい集まりで、クリスチャンのサークル等、ごく限られた場所しか思い浮かびません。聖書を知らない人に、神さまの話をするのは気が引けるそういうことはよくあることです。宗教の話をするのはタブーとされている面もあるからです。信仰の話は教会ですればいい、家庭や職場でなくてもいい、そんなふうに分けて過ごすことも多いのではないのでしょうか。

イエスさまは種を蒔く人のたとえをなさいました。4つの場所にまかれた種のたとえです。道端に落ちた種は鳥に食べられてしまい、石だらけの地面に落ちた種は芽が出て根が張れずに枯れてしまい、茨の藪に落ちた種は茨の勢いに負けて実を結べなかった。そして良い土地に落ちた種は芽生え育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。

私たちは、この後に続く聖書の箇所からイエス様ご自身がなされたたとえの説明を読み、種というのは神のみ言葉を示していて、まかれた場所というのはみ言葉を聞いた人々のことであると知っています。そして、自分はいったいどんな土地だろうかとすぐに思い浮かべるのではないのでしょうか？まるで血液型で人のタイプを判断するかのよう、私はこんなタイプ、あの人はこれ、などと、このみ言葉で自分の信仰生活を判断して、この聖句を理解していることも多いと思います。

分からなくてもいい？

イエスさまは、人々が理解しやすいようにたとえを用いてお話になるではありません。謎めいたこととして、大切な神の秘密をベールに包んだまま示しておられるのです。11節のところに「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々にはすべてがたとえで示される」とイエスさまご自身がお語りになっています。

パウロは「わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であると今日のコリントの信徒への手紙の中で語っています。人の考えや知恵でなんとかしようとせず、神の霊に助けられながら、み言葉に聞き、み言葉を語る。すでに理解した気になって聖書を読み流すのではなく、そこに隠されている神秘と

しての神の知恵にふれることができたなら、なんと幸いなことでしょう。条件の悪い三つの土地に蒔かれた種のようにならず、み言葉を自分の中で成長させられたら、なんと幸いなことでしょう。み言葉を聞いてもすぐに失ってしまうことなく、艱難が起こるとすぐにつまずいてしまうこともなく、誘惑や思い煩いでみ言葉が覆いふさがれてしまうこともなく、生涯、神のみ言葉を求めながらキリスト者として生きていけたなら、こんな幸いはありません。

あのパウロですら、「わたしは既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかしてとらえようと努めているのです」とフィリピの信徒への手紙の中で語っています。もう聖書は完全に理解したというクリスチャンや聖書の学者はいるのでしょうか。「隠された神秘としての神の知恵」とは、そんなに簡単に読み解かれてしまうような、人間と同じレベルの知恵なのでしょうか。神様が今、私にお語りくださった言葉として理詰めで理解できなくてもいい。しかし、投げ捨てることはせず、パウロのようにみ言葉をたえず追い求めながら努めていくことが、私たちにも必要なことだと思います。

神の力を秘めた種

当時の種まきは、私たちが目にするような種まきとは違い、種をばらまくような方法でした。種は、良い土地だけではなく、道端にも、石地にも茨にも至る所にまかれます。イエスさまも、弟子たちも、また湖のほとりに集まって来た群衆も、普段からよくなじんでいる種まきの光景を思い描いたことでしょう。私たちは、まずは畑の土の用意をして、種床にピンポイントで種を蒔いて、ある程度育ったら植え替えをしたり、あるいは畑に直まきするにしても、種をやたらにばらまくことはしません。

イエスさまは、「種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである」と仰いました。神の言葉を蒔く、つまり、神の言葉を語る、聖書の話をする人のことです。神の言葉はきちんと整えられた小さな種床に蒔くのではなく、ばらまくのです。種床として選別していないどんな土地にも種がばらまかれるように、どんな人にも神の言葉は語られます。

種を蒔く人は、どんなところにも種を蒔く。それが育とうが枯れようが、種を蒔く人は自分の考えによって種を蒔く場所を選んだりしません。み言葉を語る人というのは、そのようなものだといエスさまは言われます。相手の信仰の状態

がどんなであろうと、時が良くても悪くてもみ言葉を語るのです。自分の考えで語る相手をえり好みしたり、この人には聖書を語っても信じてもらえないだろうと勝手に判断せず、ただひたすらにみ言葉の種を蒔く。イエスさまは、種を蒔く人の責任などは問うていないのです。今日の箇所(の)続き二十六節からは「成長する種」のたとえが書かれています。種を蒔く人は、種がどうして成長するのかは知りません。人が昼夜、寝起きしているうちに、いつの間にか種は芽を出し成長していく。神の国は成長する種のようなものだとイエスさまはおっしゃいました。植物の種には不思議な力があります。み言葉には神の力が秘められています。語る人間の能力や、聞く人間の信仰心とは関係なく、み言葉に秘められた神の力が、み言葉の種自体が、その人のうちで大きく成長していくのです。これこそ神秘であり、神のなさる不思議な御業です。

ですから、み言葉を聞いた人が、そのみ言葉を信じて豊かな信仰生活へと入っていくか、あるいは神に信頼できずに離れてしまうか、それをイエスさまは問うことはなさいません。種を蒔いた人に、種が芽を出すことまでは求めてはおられません。なぜなら、み言葉の内にこそ神の秘められた力があるからです。

一人一人が

み言葉をお語りくださるのは神さまご自身ですが、それを託されている教会、教会に招かれている私たち一人一人もみ言葉を語ることに託されています。信じる者とされるかどうか、洗礼を受けるかどうか、私たちはつついそのことを気にしてしまいがちです。つい、気持ちが弱くなってしまふ。神さまご自身が働いてくださるといふ信頼がぐらつてしまふのです。聖書の話をして、分かってもらえるかどうか、話す前からそんなことを心配してはいないでしょうか？語ることは難しくても、信仰を基準にして行動すれば、それは神さまを証しすることになります。さまざまな場面で私たちは、キリストを伝えるチャンスがある。目の前に蒔くべき種、語るべき神の言葉は、すでに私たち一人一人に与えられているからです。